

米国の大学における留学生のトータルサポートについて

ワシントン研究連絡センター

高瀬 恵実

1. はじめに

近年、東京大学（東大）では留学生数は増加傾向にあり、政府の掲げる留学生 30 万人計画の影響で、今後ますます増えていくであろう留学生の担当部署へのニーズが年々高まっている。

東大国際連携本部の洪特任教授によると、留学生が日本（東大）に定着するための支援として、次の 3 点について、全学的な観点でソフト面、ハード面、制度面での十分な支援・サービスが必要であるようだ。まず、入国手続きや住居探しを含めた生活全般。次に、勉学や研究に専念するためのキャンパス生活。最後に、就職（キャリア育成）に関する支援である。これらの支援は、留学生が来日した日から東大を離れる時まで継続されるべきである。

東大外国人留学生などの現状として、81%が留学、研究・教育に満足しているが、生活面に対する不満がある留学生は半数を遥かに超えている。彼らは主に住居・住環境に不満がある。外国人のための宿舍の絶対的量の不足、賃貸における日本の商習慣（連帯保証人、敷金・礼金等）、家賃も高く、外国人向け物件の少ないこと、日本語のみの契約書等、外国人にとって不利な要素が多いことへの戸惑いが原因である。

また、キャンパスの中に、地域や学内の情報を提供するとともに、日本人との交流の拠点となるような場が必要である。現在設置が予定されている国際交流センター（仮称）の一角にそのような場を設置することが検討されている。

さらに、就職に関しては、留学生の半数が民間企業への就職を望んでおり、その半数以上が日本での就職を希望しているが、日本語能力の不足や日本企業や文化に対する理解不足、待遇やキャリアに対する不安、学位取得のための研究に忙しく、十分な就職活動や対策ができていない。彼らが国内での定着に不安を感じているのも実状である。また、「求職—求人」間のマッチングを促進するために両者間の希望、期待とともに学位取得後の就職と採用の実績を調査分析し、マッチング促進モデルを検討中である。求人側が期待する高度専門職外国人の採用条件を具体的に知る必要がある。博士課程在籍留学生を対象とした就職支援のためのプログラムも含め、包括的な観点から就職支援モデルを検討している。

このように、留学生に対する支援策や改善策が東大独自で考えられているが、留学生が世界で最も多い米国の大学では、どのような工夫がなされているか調査してみた。

2. 調査対象、調査項目

実地調査として、ペンシルバニア州立大学（ペンシルバニア州、州立）、ハーバード大学（マサチューセッツ州、私立）、イェール大学（コネティカット州、私立）、フロリダ大学（フロリダ州、州立）（インタビュー順）でそれぞれインタビューを行った。4大学の選定理由としては、東大と同規模もしくはそれ以上の留学生数を抱えていることや、東大のように多数の学部や研究科をもつ大規模な大学であることである。

インタビューでの質問事項は、留学生に関する生活全般、キャンパス生活、また就職（キャリア育成）の3点に関するものであり、以下のとおりである。

- 1) 留学生担当部署（業務分担や仕事内容）について
- 2) オリエンテーション（内容、期間）について
- 3) 宿舎（規模、宿舎の数、充分でない場合の対策、留学生専用の宿舎）について
- 4) 留学生に対する情報提供について
- 5) 危機管理（学内や学外での緊急事態（交通事故、地震、自殺など）における対処方法）について
- 6) カウンセリング（体制、カウンセラーの人数、利用状況など）について
- 7) 留学生とアメリカ人学生が交流する機会や場所について
- 8) 就職活動の支援（留学生専用の就職フェア等のイベント、情報提供）について
- 9) 職員の語学力（英語以外の言語が話せる職員、それらの職員の採用）について
- 10) その他、留学生のリクルート方法、留学生のサポート体制の改善点、留学生にとってチャレンジングだと思う点について

3-1. ペンシルバニア州立大学 Penn State University (University Park)

★データ

学生数：43,252名（University Park 本部キャンパス限定）

留学生数：3,860名（大学全体で23キャンパスあるが、留学生のほとんどは University Park キャンパスにおり、外国人研究者等も含めると6000名を占める。留学生数の多さは全米22位。Opendoors2008調べ。）

創立年：1855年

インタビュー対応者：Dr. Neger C. Davis -Director of Global Relations and Promotion

1) 留学生担当部署について

2009年7月1日からグローバルプログラムオフィスの組織が新しくなり、事務が簡素化された。グローバルプログラムオフィスには50名のスタッフがいる。

☆業務分担（次頁の組織図を参照）：

① Directorate of Education Abroad :

主に学生をサマープログラム及びセメスタープログラムにより米国国外へ派遣（留学）させる部署。国外への留学を考えている学生の相談にのったり、新しい留学プログラムを考案したり、現プログラムの成功を評価する部署。

② Directorate of International Student Advising(DISA) :

主に入国管理関係担当の部署。ビザ関係、J1 スカラー、留学生の個人ファイル（パスポートの写し等）の管理。4000名の相談窓口となっている。相談内容や必要に応じて他部署の担当者（カウンセラー等）を紹介している。

③ Directorate of Global Relations and Promotion : ※Dr. Davis の部署。

留学生及びアメリカ人学生や教職員と地域社会を交流させる文化的なイベントの担当。新入生向けのオリエンテーション、インターナショナル・コーヒアワー、地域社会へのアウトリーチ活動等を実施。また、留学フェアを開催。

広報関係： 出版物にオフィスのロゴが入っているかどうか、ホームページの管理等。

企業関係： ホンダ、トヨタ、ソニー等の企業にスポンサーされている500名の留学生（フルブライド等政府がスポンサーとなっている学生を含む）担当。

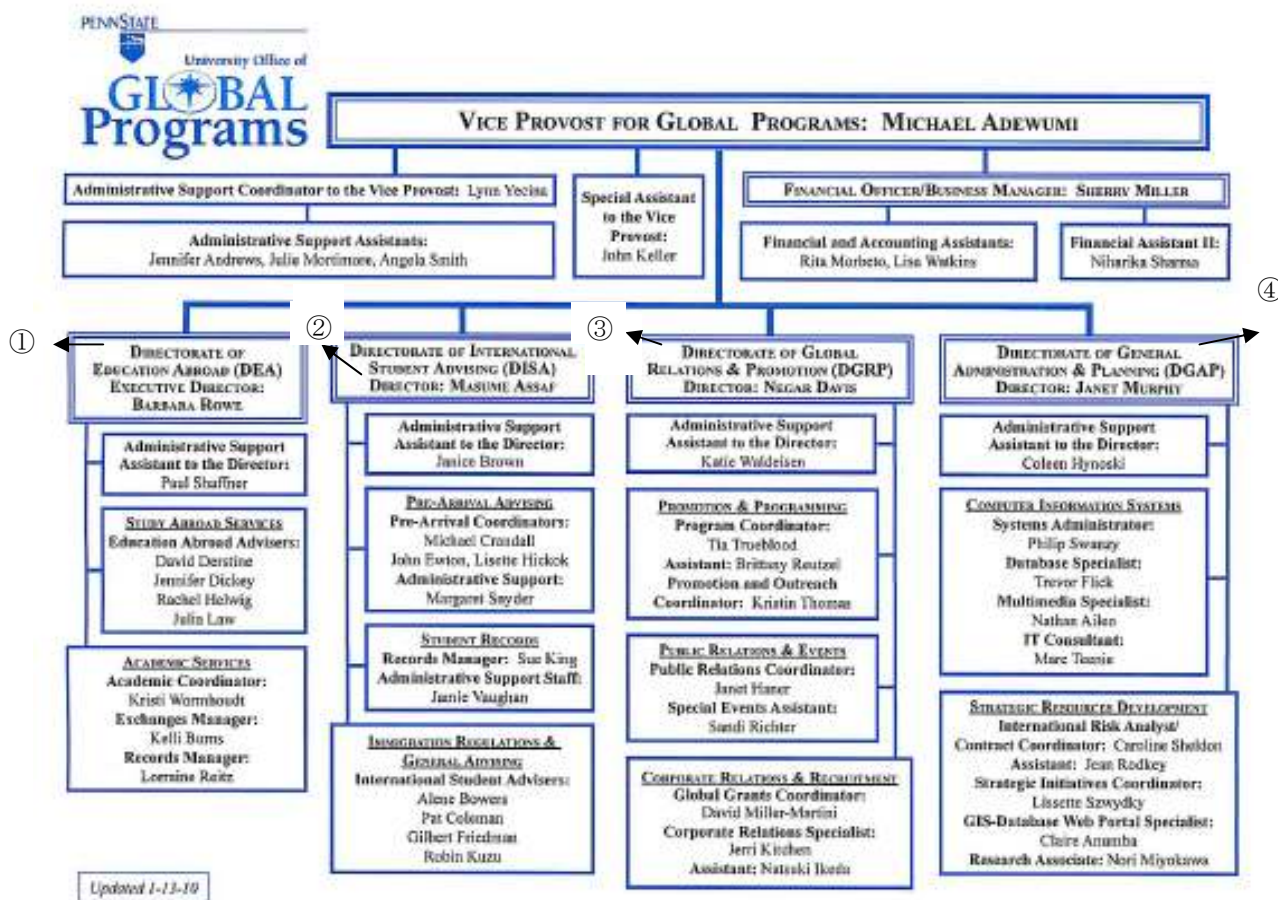
④ General Administration and Planning :

人事管理、IT 関係、オンライン教育、オリエンテーションの様子をホームページに掲載する等。

協定担当： いずれウェブ上で世界地図のどこかの国をクリックすると、その国との協定や留学生数が分かるようにする予定。

契約担当： グローバルプログラムが業者と契約する場合は全てここを通す。

☆グローバルプログラムオフィスの組織図：



各学部にアカデミック・アドバイザーがいる。学生（留学生含む）には担当のファカルティ・アドバイザーがつき、履修指導をしてくれる。中には専門のアドバイザーもいるが、大学の教員がアドバイザーを務めている場合もある。就職相談についても全学生対象である。

2) オリエンテーション

留学生には2週間、アメリカ人学生には1週間のオリエンテーションが実施される。

担当職員の業務としては、空港からの送迎、仮宿舎への案内、オフィスでパスポートやビザ等の必要書類の確認作業、学長を交えたレセプションやピクニック等を企画及び運営。オリエンテーションの内容としては、大学生活を送る上で重要事項である、キャンパス内の安全、授業料、IDカード、買い物、社交行事など多岐にわたる。140名のボランティア（在籍しているアメリカ人学生および留学生）がオリエンテーションを手伝っている。

<年間スケジュール>

秋：1200名が参加し、期間は2週間。このうち1週間はグローバルプログラム担当。残りの1週間は大学全体が実施。

春：150名程度が参加し、期間は2週間。

夏：5月と6月のサマーセッションに参加する学生（少人数）向けで、期間は1週間。

3) 宿舎

寮は26棟以上あるが、充分ではない。寮をもつ University Park 以外のキャンパスでは入居は先着順である。基本的に University Park の新生は学内にある寮に住むことになっている。どうしても嫌な場合、正当な理由があれば学外に住むこともできる。

留学生専用の宿舎はないため、アメリカ人学生と共同利用している寮の部屋数(新生分)をなるべく確保しようとしている。学外の宿舎より学内の宿舎の方が人気である。学外の宿舎は、University Club と International Friendship House (30 部屋) の2種類がある。大学としては、留学生とアメリカ人を交流させたいため、学部ごとの寮がある。禁煙禁酒者専用の寮もある。

4) 情報提供

Twitter、eメール、Facebook、ニュースレター等で知らせている。最近では、緊急連絡をする際に携帯電話のテキストメッセージを使って知らせることも多い。(※米国では携帯電話の番号がわかればテキストメッセージが送れるシステムになっている。)

5) 危機管理

大学には Campus Police がいる。最近、NY とフロリダで在学生の乗車している車による交通事故があった。このような学外の緊急事態の連絡の流れとしては、地元の警察からまず Campus Police に連絡がいき、そこから Student Affairs Office やその学生の所属学部、Dr. Davis、もしくは DISA の Director に連絡がいく。その連絡を受け、留学生の出身国にいる親へ連絡するのが Dr. Davis の役目である。その後、学内にあるその留学生の出身国のコミュニティーや、大使館にも連絡をする。学内で緊急事態が起こった場合は、まず Campus Police に通報がある。その後は学外のケースと同様である。(問題の内容により初めに連絡する人は変わってくると思われる。)

6) カウンセリング

Student Health Center では、学生が気軽に立ち寄れるラウンジのような空間があり、健康関連書籍を集めた図書館、フルサービスの薬局、会議スペースがあり、メンタルヘルスに関するカウンセリング専用のフロアもある。そこには、グループセラピー用の部屋、瞑想室、待合室、60 の診療室がある。過去に比べ利用者が増えている。土曜日は予約なしでも診断してもらえるが、平日はなるべく予約した方がよい。予約はオンラインまたは電話で受け付けている。

7) 留学生とアメリカ人学生との交流

大学の理念として、文化的背景に関わらず（アメリカ人学生、留学生の区別なく）学生の交流を促すことが背景にある。

International Peer Mentor プログラムと言う、留学生一人に対し、必ず一人ボランティアの学生が担当するシステムがある。

8) 就職活動の支援

大学主催で行う就職フェアでは、企業側にも留学生の採用に関する留意点をきちんと伝えている。留学生だけのための就職フェアは行っていない。留学生だからといって特別扱いはせず、アメリカ人の学生と同じサービス（レジュメの書き方や面接への望み方）を提供している。

9) 職員の語学力

英語以外の言語が話せる職員はいるが、外国語が堪能な職員をさらに増やすことを目標としている。現在 10～15ヶ国語（ヒンズー語、中国語、日本語、ドイツ語、トルコ語等）なら常勤職員で対応可。院生のアシスタントやボランティアを含めると、135ヶ国語対応可。外国語が話せると採用時に有利になる。

10) 留学生のリクルート方法

雑誌等に広告は載せていない。口コミの影響力が大きいので、実際に在籍する学生に対するサービスを充実させることが大切である。大学としては 10 年間宣伝し続けているが、5 年前にグローバルプログラムオフィスができてからは広報活動を支援しており、年々留学生は増えている。現在、留学生の在籍数は全米第 23 位であり、5～7 年後には留学生を 2 倍に増やしたいと考えている。留学生のうち 73%がアジア出身であり、日本人は 10 番目に多い。中国、韓国、インドがトップ 3 である（Institute of International Education 調べ）。

3-2. ハーバード大学 (Harvard University)

★データ

学生数：19,987 名

留学生数：4,948 名（外国人研究者は 3500 名。留学生数の多さは全米 9 位。Opendoors2008 調べ。）

創立年：1636 年

インタビュー対応者：Dr. Sharon Ladd -Director of Harvard International Office

1) 留学生担当部署について

Harvard International Office (HIO) : 本部に属している。HIO の Advising Staff はそれぞれあるカレッジの担当をしている。仕事内容としては、入国管理関係、家族のケア、定住のケア等である。

留学生には必ず担当のアドバイザーが割り当てられる。経験豊富なアドバイザーが入国問題、社会的・文化的問題や個人的な悩み相談にのってくれる。ビザについて不安なことがあれば HIO へ相談するよう留学生に伝えている。

2) オリエンテーション

☆Getting Started : HIO 主催のオリエンテーション。8 月は週 2 回開催され、それ以外の時期は 2 週間に 1 回のペースで行われている。最近ハーバード大に来たばかりの留学生や外国人研究者がお互いを知り、銀行や電話、交通安全、米国での健康管理、大学内の施設 (図書館や運動場等)、配偶者のための情報、住宅問題、税金や入国問題について学ぶ。また、8 月に配偶者のためのオリエンテーションも行われる。

☆学部主催 : 秋学期のはじめに各学部でもオリエンテーションが行われる。(春学期に行う場合もある。)

☆Freshman International Program(FIP) : Dr. Ladd の担当。新入生担当オフィス(FDO) と HIO の共催で、新入留学生 (学部生) 対象 (米国で教育を受けたことがない人、米国で少ししか教育を受けたことがない人、米国国籍だがほとんど海外で暮らしてきた人向け) のオリエンテーションが行われる。FIP は無料であり、自由参加型である。内容は、学生及び学業生活、入国や税金についての重要な情報等についてである。FIP の招待状は春に参加資格のある学生宛に承認通知と一緒に送付される。宿泊先や大半の食事は提供される。

3) 宿舎

最近の統計結果によると、毎年 1300 件の空き物件が出る。時期や希望する物件にもよるが、約 3 名中 1 名の確率で空き物件に入居できる。学内の寮の空き状況については、直接学部から学生へ情報がいく。もし空きがあればそこに入ることを強く勧める。学外の宿舎の方が家賃は高く、特にケンブリッジ周辺は物件も少なく、大学に近いため人気である。

大学の寮は、教職員は対象外である。

学部ごとに HP に物件情報を載せていたり、掲示板に学生が張り紙をしていたりする。

<学部生>

ほとんどの新入生は Harvard Yard という寮で暮らし、2 年生以降は House と呼ばれる寮システムに属し (合計で 12House)、大部分の学生が Harvard House に寄宿する全寮制となっている。

<大学院生>

教養学部では宿舎が足りない。その対策として、新しくケンブリッジに Graduate

Dormitory が 2 棟できた。趣旨としては、様々な学部の学生を交流させることである。

ビジネススクールの学生は、ほとんどが既婚者のため、アパートを借りているパターンが多い。

☆The Harvard Housing Office

大学の付属宿舎や学外住居情報の主要リソースである。付属宿舎とは、学生や従業員対象の物件も含む。

留学生専用の宿舎として、**Shattuck International House** があるが、留学生に限定されている訳ではなく、アメリカ人でも入居可能である。基本的に、ハーバード大としては留学生とアメリカ人を交流させたいため、あえて留学生専用の宿舎は設けていない。

4) 情報提供

情報提供の仕方は、各学部によって異なる。各スクールの発行しているニュースレターは、特に留学生だけをターゲットにはせず、学生全体に向けて情報発信をしている。

HIO からニュースレターを年に数回発行している。例えば、10月のトピックは永住権の抽選、米国で働くこと、ビザの延長についてであった。

留学生にとって基礎的な情報である **Important Pre-Arrival Information** (冊子) を HIO がオリエンテーション開始前までに全員に郵送しているが、PDF 版がホームページにも掲載されている。

5) 危機管理

命にかかわる緊急事態については、ただちに 911 (日本の 110 や 119 にあたる) へ通報。緊急の医学的な心配事や症状については、**Harvard Square** にある **Halyoke Center** の **The After Hours Urgent Care Clinic (AHUCC)** へ。AHUCC は、学生の危機的状態には夜中や土日や長期休暇中であっても、24 時間体制で対応している。心身に何かしらの治療が必要であるが、どれくらいの緊急事態なのか自分で判断できない場合、臨床医に電話して聞くことができる。可能である限り、学生には事前に電話をして初期手当もしくはメンタルヘルスケアプロバイダーによりアドバイスをもらうことを勧めている。緊急事態でない場合は、営業時間内に担当者に連絡をとるように指導している。

ハーバードポリスは、自転車か徒歩で学内をパトロールすることで親しみやすさを出している。新入生対象のオリエンテーションで、個人の安全について講義を行っている。ノート型 PC や自転車等の盗難にも対応してくれる。

学外での緊急事態については、HIO が連絡窓口となっており、ハーバードポリスも HIO に連絡してくる。深刻な場合、事件のあった地域の警察からハーバードポリスへ連絡がくる。

6) カウンセリング

Harvard University Health Services (HUHS) : 全学部のカウンセリング及びメンタルヘルスのサポートをしており、全学生が満足するよう努めている。学業、人間関係、アルコール、セクハラ、うつ病や心配事について相談できる。スタッフとしては、メンタルヘルスの専門家（臨床医）が男女 31 名おり、大学生の相談経験が豊富である。スタッフの大半が過食症、拒食症、人間関係、アルコールやドラッグ問題、慢性病についての専門知識がある。まず、スタッフの一人と面談の予約をし、相談をしながら解決方法を見つけることを勧めている。実際に、大勢の学生が **HUHS** を利用している。要望によっては、個人、カップル、グループ、家族で相談できる。

メンタルヘルスサービスのカルテは一般的なカルテとは別に保管されており、**HUHS** のその分野専門のスタッフしか見ることができないようになっている。

スタッフは、留学生が他の学生よりも特にストレスが多いことを理解している。中には韓国語を話せるスタッフもいる。以前、日本語対応可能なスタッフ（作家エズラ・ヴォーゲル氏の妻）もいたが、退職した。

学生には、相談内容は秘密厳守である点（家族構成等を含む個人情報特定のスタッフしかアクセスできないようになっている）と、米国ではメンタルサービスに行くことはいたって普通のことであるという点を伝えるようにしている。

HUHS でのカウンセリングの他にも、各学部には学生部長（**Dean Office**）がおり、彼らに相談することもできる。

また、一部のカレッジで **Bureau Study of Council** があり、論文の個人指導等が受けられる。

7) 留学生とアメリカ人学生との交流

<学部生>

各学部によって異なる。**HIO** はオリエンテーションしか主催していないが、普段から留学生とアメリカ人学生は寮で共同生活をしているため、わざわざ交流させるイベントを行う必要性を感じない。

<大学院生>

教養学部では、**Dudley House** で行事が行われる。全大学院生が対象である。

8) 就職活動の支援

各学部にはキャリアオフィスがあるため、サービスは各学部によって異なるが、共通しているのは情報収集ができる場所であるという点だ。ビジネススクールでは、**H1B** ビザについて積極的にサポートしている。

また、留学生専用の就職フェアも開催している。**Office of Career Services** は留学生に協力的である。過去に入国管理局とやり取りをした先輩が講演を行ったりしている。

9) 職員の語学力

HIOには英語以外の言語が話せるスタッフがおり、出身国としては、中国(2名)、ユーゴスラビア、パキスタン、スペイン、ドミニカ共和国(各1名)である。ただ、ハーバード大へ来る留学生は、ある程度の英語力が必須であり、それをクリアしてから大学へ来るため、スタッフは彼らの母国語で対応する必要があまりない。

スタッフに求める条件としては、ビザや入国管理等に関する知識や経験がある程度あり、何より留学生や外国人とやり取りできる対人能力があることが重要である。

10) 留学生のリクルート方法

各学部によって異なるが、担当者は各国へ広報活動に行き、留学生獲得・増加を目指して情報提供等を行っている。例えば、ある学部の担当者はアフリカに行きリクルート活動をしている。アフリカの学生は既にハーバード大に来ることを諦めている人が多いため、留学生もファイナンシャルエイド(※一般的に、学費の負担を軽減するための金銭的支援プログラムすべての総称。米国の場合、金銭的支援には、大きく2種類あり、親の収入が少ない人対象で将来返済の義務がある「ニードベース」と、優秀な学生を対象とした返済が不要の「メリットベース」がある。留学生の場合、大半がメリットベースをもらっている。)がもらえることを世界へPRしている。広報の成果が出ているからか、ハーバード大では2003年から毎年留学生が増加している。

留学生の出身国を国別に見るとカナダ、中国、韓国、インドと続き、日本は7番目(107名)に多い(2007年11月現在)。

3-3. イェール大学 (Yale University)

★データ

学生数：12,495名

留学生数：2,062名(うち日本人は学部生：5名、院生：60名弱)(留学生数の多さは全米61位。THE CHRONICLE of Higher Education調べ。)

創立年：1701年

インタビュー対応者：

Dr. Ann Kuhlman -Director of Office of International Students & Scholars (OISS)

田邊亜紀氏 -International Affairs Associate (Asia), Office of International Affairs

1) 留学生担当者について

☆Dr.Kuhlmanの担当業務：入国管理関係とコンプライアンス以外に、サポートプログラムやサービスを留学生や外国人研究者に提供している。

☆田邊氏の担当業務： 韓国と日本に関する広報（PR）担当。イエール大の学生が日本で行うインターンシップの担当。Language study 担当。日本人教員（15名）の出張、並びに日本人及び韓国人の留学生や Visiting Scholar のお世話もする。

※Dr. Kuhlman のいる OISS と田邊氏のいる Office of International Affairs は全く別の組織である。

2) オリエンテーション

新入生は所属学部から学部のオリエンテーションに関する情報をもらう。これに参加することはとても大切である。それに加え、留学生には、留学生を対象として企画された The Orientation for International Students(OIS)に参加することを勧めている。

☆OIS: プレオリエンテーションであり、大学とニューヘブンの街を紹介するプログラム。米国の教育システムについて何も知らない人のレベルにあわせて行われる。参加者全員と知り合える良い機会である。

対象： 新入留学生（学部生）

主催&運営： イェール大に在学中の留学生（学部生） & OISS

期間：4日間（2009年は8月24日～27日に行われた。通常の新入生対象のオリエンテーションは28日から開始。）

内容： 学生生活、米国文化への適応について。キャンパスツアー、地域巡り、買い物、銀行口座の開設等。ピクニック、サッカー、映画鑑賞等、新しい友人と過ごす時間も沢山ある。

申込方法： ホームページより。

参加料： \$200（食事&宿泊料込み）（※メリットベースの Financial aid を受けている学生は参加料免除。）

☆International Spouses and Partners at Yale (ISPY) Orientation： 2000年秋に OISS の援助により設立。もともと、留学生の配偶者やパートナーのネットワーク作りのために設立されたが、2009年からアメリカ人も加入し国際的なグループになった。まずは ISPY のメーリスに入り、ホームページに行くと、様々な趣味やプレイグループ等について知ることができる。興味のあるグループに加入すれば、そのグループのイベントについて知ることができ、積極的に集まりに参加し、どんどん新しい知り合いを増やしていくことができる。

3) 宿舎

OISS のホームページには、学生が住んでいる地域、家賃や保証金等について参考になる情報が載っている。

また、OISS の向かいには入居者の半分以上が留学生である寮があるが、留学生専用の宿舎はない（1 年間の交換留学生制度が存在しないため）。夏休み限定で来る Summer time Student は、夏休みに空いている寮の部屋を利用可。

<学部生>

新入生は入学時、12 ある Residential Colleges (RC : 学内宿舎) の中のどこかを Dean's Office によってランダムに割り当てられ、その情報を所属の学部から伝えられる。RC はイエール大での生活の中の重要な役割を果たしている。それぞれの RC は 1 名の Principle Advisor となる教員によって率いられており、共同生活をしている。ジム、映画館、バスケットボールコート等が完備されている。RC には学部生の配偶者や子供も住んでいる。3、4 年生になると学外に引っ越す学生もいるが、ほとんどの学生は環境が良いため 4 年間 RC で暮らす。

<大学院生>

インターネットを使い、学内もしくは学外の住居を自力で探さなければいけない。学内の宿舎は不足している。(実際に学内に住んでいる大学院生は全体の 20%)

4) 情報提供

留学生にとって基礎的な情報が載っている Handbook for International Students & Scholars (冊子) の PDF 版がホームページから入手できる。

毎週木曜日に e-ニュースレターが配信される。入国管理関係、週末に行われるイベントの紹介、学生グループのリストを掲載したりしている。ごく稀に特定の国籍の学生だけにメールを送ることもあるが、極力学生にメールを送りすぎないように気をつけている。

田邊氏が担当している“East Asian Council”は、教職員や学生が参加できるグループで、メーリングリストに加入するとイベント情報(インドの映画、フェスティバルのお知らせ等)が送られてくる。Dr. Kuhlman もメンバーである。

5) 危機管理

命にかかわる緊急事態には 911 へ通報。もしくは、最寄りの病院の救急処置室（予約不要）へ行くよう指導している。

YHP では緊急事態には 24 時間訪問を受け付けている。命にかかわる程ではない緊急事態についてはまず電話連絡を。

☆イエールポリス： 正規の警官隊であり、都会の警察と同様のサービスを提供。キャンパス内のパトロール、2-WALK、青い電話等を提供。とても親切で協力的である。

- ・2-WALK (エスコートサービス) : 夜中にキャンパスのどこかへ移動したい場合、15 分前に連絡をすれば、警備員が徒歩、自転車、もしくはパトカーで 24 時間いつでもエスコートしてくれるサービス。夜中にキャンパスを一人で歩くことはお勧めできないため、このサービスを学生や教職員も頻繁に利用している。週末も利用可。駅からの送迎もし

てくれて便利である。近所に住んでいる人同士であいのりすることもある。

- ・緊急用の青い電話： キャンパス内に 400 台設置されている。緊急事態に赤いボタンを押せば、どこの電話機からかけているか相手に自動的にわかり、イェールポリスがすぐに対応するが、電話機の前にずっと待機できない場合は、移動する度に赤いボタンを押していけば、どこへ移動したか把握できる。キーパッドで内線番号を押せばキャンパス内のどこにでもつながる。セキュリティーカメラが設置されている電話機もある。

6) カウンセリング

学生向けに、無料のメンタルヘルスチェックがオンラインで匿名で受けられる。

Yale Health Plan (※イェール大の学生、教職員などが加入できる医療保険。学生向けのプランは、年間 \$ 1632。学位を取得しようとする学生は自動的にこのプランに加入することになる。他の医療保険に加入している場合、9月15日までに **Waiver Form** と証拠書類を提出すれば **YHP** は免除される。) のメンバー及びその扶養家族で、カウンセリングや精神療法が必要な人は **Yale University Health Services(YUHS)** のメンタルヘルス・カウンセリング科に電話もしくは訪問できる。スタッフは、留学生から米国への順応プロセスについて相談を受けることに慣れている。緊急の場合は、24 時間体制で医者が対応してくれる。営業時間は、月～金の 8:30～17:00 で、事前の電話予約も可能である。

留学生専用のカウンセラーはいない。そもそも、イェール大にカウンセリングセンターというものは存在しない。その代わり、**YUHS** のカウンセラーは大勢の学生に利用されており、(利用率はアメリカ人学生も留学生も同程度) 全学生に対して質の高いメンタルサービスを行っている。英語が不得意な学生は、通訳サービスも利用できる。

☆**Yale Employee Assistance Program (EAP)** : 教職員とその家族対象のプログラム。職場や家庭での生活に影響を与えるような悩み(夫婦問題、家族問題、麻薬や飲酒による虐待、職場でのプレッシャー、離婚、加齢、退職、病気などで生活スタイルが変わった場合等)があり、緊急で内密に専門家の助けが必要な場合に利用できる。**Wellness Corporation** が実施している。

7) 留学生とアメリカ人学生との交流

大学では毎日 40 ものイベントが行われている。それらの中で自分の興味のあるイベントに参加することで自然と交流ができるはずである。あえて「留学生と交流する」という名目のイベントを開催することはしていない。

日本人の学部生はたったの 5 名しかいない。少ないからこそ、アメリカ人と一緒にいることが多い。逆に韓国人や中国人は多いので、同じ人種同士でかたまっている傾向が強い。

☆英会話のサポート

- ・英会話グループ: 毎日 **OISS** によって主催されている。英語を第二外国語とする留学生や配偶者が、楽しみながら、形式ばらない英会話のスキルを伸ばしていくのが目標。新しい

知り合いを増やし、米国の文化について知ることができる良い機会である。教員免許を持っていない OISS の職員や大学院生等が、報酬なし（ボランティア）で教えている。毎回 1 クラス約 12～20 名の規模である。医学部では、ポストク対象のクラスが月 1 で開催されている。

- ・マンツーマンレッスン：留学生や外国人研究者とその配偶者と、ニューヘブンやイェールコミュニティのボランティアの間での語学及び文化の交換プログラム。週 1 で 1 時間、学内外問わずお互いが都合の良い場所で、最低 4 週間は続けることになっており、目標としては 1 学期（12 週間）継続すること。定年退職した人もボランティアで教えている。

8) 就職活動の支援

10 ある学部それぞれキャリアサービスがある。米国での就職活動の特徴、アメリカ人との面接で気をつける点などについてアドバイスを受けることができる。

留学生専用の就職フェアはないが、留学生対象のプログラムは実施しており、11 月に多数のプログラムがまとめて行われている。

OISS では就職面に関して手助けはそこまでしていないが、相談に来ても構わない。

9) 職員の語学力

OISS には 13 名の職員がおり、スペイン語、フランス語、イタリア語が対応可能である。（中国語を話せる職員もいたが現在はいない）。語学が堪能ということ以外にも、OISS では様々なスキルが必要である。例えば、個性があり、何より留学生と接することに喜びを感じ、忍耐力があり、入国管理関係業務について理解力が早く、何か新しいことを覚えるのに意欲的で、テクニカルスキルを持っている人が理想的である。

10) 留学生にとってチャレンジングだと思う点

悩みがあっても相談しに来ない学生がいる。そういう学生がいることを耳にしたら、OISS の存在を教えている。また、長期的なサポートが必要な学生もいる。留学生は入学するためにある程度の英語力を求められ、実際入学する時点では高い英語能力を有しているため、言葉の問題は研究者により多くみられる。

10) 留学生サポート体制の改善点

おそらくこれ以上サポートプログラムを増やす必要はない。留学生の配偶者や子供へのサポートに力を入れたい。また、年に 6～8 回旅行を企画し実行しているが、人気があるので、もっと増やしてあげたい。

3-4. フロリダ大学 (University of Florida)

★データ

学生数：50,000名（全米第4位を誇る規模。）

留学生数：毎年約3500名（現在、学部生：362名。大学院生：3102名。うち日本人は学部生17名、院生29名。）（留学生数の多さは全米16位。Opendoors2008調べ。）

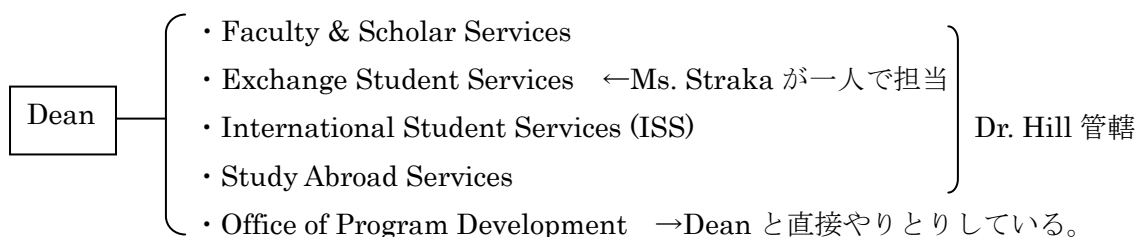
創立年：1853年

インタビュー対応者：

Dr. Susanne Hill -Executive Director of University of Florida International Center (UFIC)

Ms. Lyn Straka -Exchange Program Advisor

1) 留学生担当部署について



<定義>

Exchange students：学位取得はしない。コースだけ受けた場合（単位だけ取得する形）。提携している大学からの交換留学生。学部生と大学院生の比率は半々である。

International students：Exchange students 以外の留学生。学位取得が目的。大学院生が多い。

2) オリエンテーション

留学生向け、学部生向け、各カレッジで行われる大学院生対象のオリエンテーションをはじめ、世界中から来た研究者、スポーツ推薦で入学した学生、編入生（コミュニティーカレッジから転籍・編入してくる学生も多い）等、様々な人たちを対象としたオリエンテーションが行われている。

3) 宿舎

学生は自己責任で住居を確保することになっており、学内（フロリダ大学(UF)が所有している物件）と学外（企業や個人が所有している物件）の両方で暮らしている。

ISS スタッフは住居選びに関して助言することはできるが、責任を持つことはできない。

学内の物件には、寮、Co-ops（掃除やメンテナンス作業は自分たちですするため寮より家賃が安い。部屋にエアコンがない場合もある。）、アパートの 3 種類がある。全ての学内物件にはウェイティングリストがあり、希望した物件に入居できるまで最低 6 週間から 1 年かかる。

ほとんどの新入留学生はまず学外に住む。これは彼らが入学する時には既に学内に空き物件がないからだ。彼らは車を持っていない上に、キャンパスでの駐車場問題（UF では駐車場が足りない）に煩わされないよう、大勢の留学生はキャンパス周辺に住む。

Exchange Students は基本的に寮に住めないため、3 分の 2 は学外に住んでいる。

<学部生>

カリキュラム上、1 年生の時は、学内に住むことが求められている。2 年生以降は学外に住む人が多い。留学生は、一般の学生同様、UF に合格後宿舎に申し込むことができる。

学部生専用の寮は 24 棟ある（計 7,547 床）。このうち学内にある留学生が利用できる（学部生専用）寮は 1 つだけ（入居者はアメリカ人学生と留学生が半々）。ほとんどが 2 人部屋で、1 人部屋は 144 部屋中 4~8 部屋しかない。男女共同の 4 階建てで、1、3 階は男性フロア、2、4 階は女性フロアに分かれている。トイレとキッチン各フロアで共同。現状の 144 部屋では充分ではない。ただ、中にはルームシェアをしたくない学生もいるため、全員がこの寮を希望するわけではない。

<大学院生>

大学院生専用の寮（家族用）は 5 つあり、留学生も住むことができる。現在、773 名が学内で暮らしている。

☆Yullee Hall : United World College Program(UWC)という巨大な奨学金制度（UWC の学生であり、米国国籍ではない学生対象。8 セメスターもしくは卒業まで給付される）があり、その制度で来ている学生のみを対象にしている寮（唯一の教員の宿舎でもある）。彼らの授業料、食費、家賃はほぼ全額免除される。管理人は Housing Center。

（※参考：年間のおおよその授業料\$31,150。年間の UWC 奨学金\$27,650）

☆Residence Assistance(RA) : 寮の各フロアの代表であり、イベントコーディネーターの様な役割を担っている。ほとんどが学部生である。面接で選考され、1 年契約であるが、再申請も可。RA である間、寮費は全額免除。

4) 情報提供

米国国籍ではない International Student で、メーリングリストに登録した人には UFIC からメールが送られてくる。

Handbook for International Students & Scholars（冊子）の PDF 版がホームページから入手できる。

5) 危機管理

大学全体レベルとして、56,000名の携帯電話情報を保持。学生は緊急連絡先として携帯の番号を大学へ教えることになっている。個人レベルとして、電話連絡網がある。

また、留学生が困った時に24時間いつでも連絡がとれる電話番号がある。この携帯電話を Ms. Debra Anderson (ISS コーディネーター) が持っている。例えば、空港で入国を断られた場合や、海で溺れるという緊急事態に留学生から連絡がきた場合、Ms. Anderson が対処方法を考えることになっている。水泳の経験がないままフロリダに留学してくる学生もあり、海では今までに留学生の死者が1名以上出たこともあり、水泳レッスンが行われるようになった。

キャンパスには UF ポリスがいる。彼らは Ms. Anderson と Dr. Hill の電話番号を知っているので、first contact として UF ポリスに連絡が入ったものも必要に応じて、何かあれば連絡が入るようになっている。

6) カウンセリング

どこに連絡したら良いか分からない場合、まず UFIC か Student Services Office に電話するよう伝えている。Student Services Office では、様々な悩みをサポートする連絡先のリストを掲載した「学生の救命具 (ライフセーバー)」という名のパンフレットを発行している。

☆The International Student Services (ISS) : 入国問題に関する質問、入試や学業や個人的なカウンセリング、緊急事態の対応等のサポートをしている。営業時間は月～金、8am-5pm。留学生は基本的にまず ISS に相談に来る。深刻そうであれば、ISS スタッフが学生をカウンセリングセンターに連れていくこともある。

☆The Office for Student Services : 退学、裁判沙汰トラブル、障がいのある学生やマイノリティ学生問題、女性問題、男子・女子学生社交クラブ問題等についてのサポートをしている。キャンパスのあらゆる情報を管理している情報センターと言える。留学生は単位を落とす前に必ず ISS へ行かなければならない。

☆カウンセリングセンター : 生徒や配偶者の個人的な相談、就職相談、学業相談に応じている。精神分析医やピアカウンセラーは、1対1でカウンセリングを行う。グループワークショップやプログラム、講習を行っている。スタッフメンバーは32名。(16名 : シニアスタッフ、1名 : ビジティングスタッフ、3名 : ポスドクアシスタント、5名 : インターン、1 : カウンセリングインターン、6 : 訓練中の学生。) 最近、留学生に関心のある中国人のスタッフを雇用した。本人も留学生と同じような経験をしているから相談にのりやすいだろう。他にも第二外国語を話せるスタッフはいるはずである。カウンセリングセンターは Dean of Student Service の管轄である。

☆NEXUS テープ情報サービス : 「孤独とどう向き合うか」「友情のきづき方」等についてのテープを聞くことができる。NEXUS に電話をし、聞きたいテープ番号を言うと、そのテ

ープを聞けるというサービスである。テープの全リストは大学の電話帳に載っている。

ISS のカウンセラーや、Peabody Hall のカウンセリングセンターでの相談や、その他のサポートオフィスは秘密を厳守している。ISS のスタッフは留学生には悩みがつきものだとすることを十分に理解している。一般的なメンタルヘルス、うつ、自殺、ドラッグ乱用、飲酒による虐待、レイプや性的犯罪、虐待に関する緊急連絡先の一覧がハンドブックに載っている。

7) 留学生とアメリカ人学生との交流

☆ “NAVIGATORS” (成功している例) : Exchange Students(大半が学部生)と彼らの出身国に留学を希望している UF の学生をパートナーにさせ (例えば、日本から来ている Exchange Student と日本に留学を希望している UF の学生)、交流させるプログラム。参加者は合計で 500 名。

☆ Inter-Coffee House (現在のところ意図した結果になっていない例) : 毎週金曜に開催されており、留学生とアメリカ人学生とのキャンパス内での交流が目的であるが、参加者のほとんどが留学生 (大半が院生) になってしまっているのが現状である。

(※国際交流に力を入れている大学のほとんどで Inter-Coffee House のようなイベントが行われているが、アメリカ人を参加させるにはどの大学も苦勞している。成果を出すにはもう少し時間が必要である。)

8) 就職活動の支援

The Career Resource Center は、UF の学生なら誰でも (交換留学生も含む) 利用できる。インターン情報や履歴書を添削する等のサービスがある。より大勢の学生に利用してもらうため、学生に宣伝している。

留学生専用の就職フェアは、ここ 9 年間でまだ 1 度しか行われていない。また、留学生を対象に秋学期と春学期にワークショップをシリーズで開催している。

<ワークショップの内容>

- ・在留資格や就労ビザについて
- ・採用担当者に対する自分の売り込み方
- ・履歴書の書き方
- ・面接でのテクニックや、米国と外国での面接方法の違いについて

9) 職員の語学力

UFIC の職員の 3 分の 1 以上がアメリカ人ではない。(実際インタビューした 2 名もアメリカ人ではなかった。) 現在の職員の出身国は、アフリカ以外の大陸は網羅しているはずである。また、採用時に第二外国語が話せることは望ましい。

4. まとめ

インタビューを終えて感じたことは、同じ米国の大学であっても、各大学の印象がそれぞれ違うということである。短時間であるが、留学生担当者と話ただけでも、それぞれの大学のカラーを感じる事ができた。

まず、ハーバード大は各カレッジが独立している印象が強く、授業料はもちろんのこと、就職支援や留学生の斡旋方法等、全てが異なっていた。インタビューでは、ほとんどの質問に対して「それは各カレッジによって異なるが…」という前置きがあった。その点については、ハーバード大と東大は似ているのではないだろうか。他の3大学と比べ、HIOが担っている業務が統括的なものばかりである印象を抱いた。

宿舎に関しては、4大学の中でイェール大が特に魅力的であった。東大が全寮制になることはおそくないであろうし、宿舎に投資できる資金も限られているため、イェール大と同じようなレベルを求めるのは不可能だと思われる。しかし、留学生の住居関係については現在の東大の弱みでもあるため、参考になる部分は沢山あるはずである。

情報提供に関して進んでいると感じたのは、ペンシルバニア州立大であった。TwitterやFacebookといった最新のソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)をいち早く取り入れ、情報発信をしていた。若者がその時代に一番よく利用しているツールを把握し、それらを大学側でもすぐに活用し情報発信をすることで、学生がより手軽に敏速に必要な情報を入手できる。東大もホームページやメールマガジンだけで満足せず、その時代に合わせた情報発信を参考にすべきだと思った。

キャンパス周辺が危険な大学程、大学ポリスに頼っており、様々なサービスを提供していると感じた。日本は米国と比べ治安は良いと言われているが、最近では他大学で凶悪な殺人事件も起こっているため、万が一の時のために体制を整えておくべきだと思われる。以前、東大の留学生担当部署にいた職員から、留学生専用の緊急連絡先がないという話を聞いたことがある。警備員や守衛ではなく、緊急事態には営業時間外であっても留学生担当職員と連絡がとれることが大切だと感じた。

一般市民の間でカウンセリングが普及している米国の大学では、やはり専門家を取りそろえており、人数は大学により異なるが、ハーバード大やフロリダ大では30名以上いた。どこの大学もカウンセリングを受けることは普通であるということを留学生に伝えようと努力していた。東大では留学生センターに留学生相談室があり、日本語か英語で対応してくれる(中国語、韓国語、スペイン語は予約制)、心理的な相談には専門の臨床心理士が対応するようになっているが、現在のところ8名しかいない。

調査を始める前は、留学生に対する特別なサポートに焦点を当て質問項目を設定していたが、実際に調査を開始してみると、4大学の傾向として留学生を特別扱いし過ぎないようにしているという特徴が見られ、意外であった。例えば、ペンシルバニア州立大では大学の理念として、学生の文化的背景を問わず、学生の交流を促すことが背景にあるため、あえて留

学生専用の宿舎を設けていなかった。ハーバード大に関しても同様であった。また、イエール大では毎日行われている様々なイベントに参加することで自然と交流ができるため、あえて「留学生との交流イベント」という名目のイベントは行っていなかった。つまり、留学生だけを特別扱いしないことで、ごく自然に留学生とアメリカ人学生との交流が深まっていっているのである。もちろん、フロリダ大の”NAVIGATORS”のように、意図的に交流させようという目的で企画された画期的なプログラムもあり、ぜひ参考にしたい。

5. 謝辞

最後に、この場を借りて、ご多忙の中、親身になってインタビューに対応して下さった4大学の留学生担当者の皆様にお礼を申し上げます。また、研究課題について色々と相談にのってくださり、アドバイスをくれた菅原センター長と小寺副センター長をはじめ、インタビューに同行して下さったワシントン研究連絡センターの皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。そして、国際学術交流研修中に大変お世話になった日本学術振興会と、このような貴重な機会を与えて下さった東大に心から感謝申し上げます。

6. 参考文献、ホームページ

- ◆東京大学国際化白書（本編）
東京大学国際連携本部 2009年3月調査報告
- ◆THE CHRONICLE of Higher Education, August 28,2009 VolumeLVI Number1
Almanac Issue 2009-10
- ◆Opendoors 2008 -Report on International Educational Exchange- , Institute of
International Education
- ◆東京大学 [留学生の方へ]
http://www.u-tokyo.ac.jp/res03/i00_j.html
- ◆東京大学留学生センター
http://www.ic.u-tokyo.ac.jp/index_j.html
- ◆パティオ 2740（東京大学外国人研究者・留学生の定着促進のための情報サイト）
<http://www.teichaku.dir.u-tokyo.ac.jp/>
- ◆Penn State University (Global Programs)
<http://www.international.psu.edu/index.html>
- ◆Harvard University (HIO)
<http://www.hio.harvard.edu/>
- ◆Yale University (OISS)
<http://www.yale.edu/oiss/about/index.html>
- ◆University of Florida (UFIC)
<http://www.ufic.ufl.edu/iss.htm>